

中英語ロマンスにおける他者の同化とアイデンティティの証明

サラセンの改宗譚を中心に

趙泰昊

0. はじめに

中英語ロマンスにおいて描かれる異教徒の Conversion は、決定的な出来事によって瞬時に完成するようなもの (Daniel, p. 179) ではなく、物語中の異教徒は洗礼を受けた後にも自身の信仰を証明することを求められている。本論は、主に中英語ロマンスに登場するサラセンの改宗とキリスト教世界への同化の過程を確認することで、宗教的アイデンティティが中世において先天的・遺伝的なものとして理解されており、変更が極めて困難なものであったという点を検証している。また、こうした見解から Conversion という現象について再度分析を試みることで、物語に描かれる異教徒の改宗の意義を再検討することを目的としている。

1. 中英語ロマンスにおけるサラセンの表象伝統：宗教と人種表象

中世ヨーロッパにおいて異教徒であるサラセンの身体はキリスト教徒とは完全に異なるものとして描き出される。14 世紀の中英語ロマンス *King of Tars* では、キリスト教徒の肌は白く美しいものとして、サラセンの姿は黒く醜いものとして対照的に描き出されている。サラセンは宗教だけではなく、人種的にも異なる存在として想像されており (Akbari, p. 155)、異なる宗教の信徒同士の結婚 (miscegenation) は忌まわしいものとして描かれている。更に *King of Tars* では、洗礼を受けたサラセンの首長の肌が白く変わる様子が描かれており、信仰と「人種的アイデンティティ」が密接に結びついているものとして想像されていたことが示唆されている。

一方で中世の物語では、キリスト教徒同様に美しい外見や美德を備えたサラセンが登場することがある。「彼がもしキリスト教徒であったならば」という定型表現は、こうした優れた異教徒が信仰を除いてはキリスト教徒と同質であるということを示している。先ほどの「宗教と人種の一致」とは矛盾するような「有徳の異教徒」の描写は、キリスト教徒との差異を強調する目的ではなく、後にキリスト教の宗教共同体に同化する個人をより受け入れやすい姿として描き出していると考えることができる。こうした美しい異教徒の同化もまた、キリスト教の信仰の勝利を示すものとして理解されるのである。

2. 改宗者への疑いと信仰の証明

異教徒の改宗を描く物語において、この相互に矛盾するよう見える二つの表象伝統によってサラセンの描写は構成されている。ここで興味深いことは、キリスト教徒同様の身体的特徴を備えた有徳の異教徒の改宗においてもまた、生得的なものとしての「人種的特徴」が関わってくる点である。

中英語で書かれた *Otuel* の物語において、優れたサラセンの騎士 *Otuel* の改宗は、先の *King of Tars* 同様、神の奇跡によって導かれたものとして語られる。しかし、この物語におけるその後の展開は、*Otuel* が洗礼とともに完全にキリスト教徒の共同体に受け入れられたわけではないことを示している。直後に語られるキリスト教の騎士たちの冒険の場面に *Otuel* の姿はなく、改宗者は新たに獲得されたアイデンティティを証明する必要があるものとして描かれている。この *Otuel* の例は、「有徳の異教徒」の存在によって示唆された「信仰を変えれば同化される」という単純化された構図を覆すものであるといえる。神の奇跡や洗礼の儀式にも関わらず、改宗を目指した異教徒の正体が疑われるということは、本来所有していた宗教的アイデンティティは「個人の選択によって簡単に変更することができないもの」として扱われていたという可能性を示しているのである。

3. 宗教的アイデンティティの遺伝的性質

宗教的アイデンティティが個人の選択だけでは変更できない、生得的なものだとすれば、改宗は容易には実現不可能なものとなる。この点を象徴的に示してくれるのは、中世キリスト教世界における、ユダヤ人への態度である。中世イングランドにおいて実際に改宗したユダヤ人の例からは、彼らのユダヤ人としての生得的な性質がキリスト教への改宗後も消えずに残っているものとして想像されていたことがわかる (Heng, pp. 75-77)。Robert Stacy がまとめるように、異教徒としての性質が洗礼によって簡単には消し去れないものであり、それは子孫にまで引き継がれる遺伝的なものとして想像されることがあったのである (p. 278)。

個人の性質は信仰する宗教によって規定され、更にそれは親の世代から引き継がれるものであるという考えは、物語世界においても見ることができる。例えば中英語ロマンス *Sir Gowther* では、宗教的な所属と出自が結び付けられている。物語中の老いたキリスト教徒の伯爵による *Gowther* への問い ('Syr, why dose thou soo? / We howpe thou come never of Cryston stryn, / Bot art sum fendys son, we weyn' (204-206))は、「キリスト教徒の生まれではない」と宗教上のアイデンティティをまるで生得的なものであるかのように描き出している。全てのキ

リスト教徒が洗礼の秘跡によってキリスト教共同体の一員になるとすれば、すでに洗礼を受けた Gowther はその一員であるにも関わらず、彼の宗教的なアイデンティティは、その出自によって否定されているのである。真のキリスト教徒として救済に至るために、Gowther は改悛による信仰の証明を求められることになる。

4. Conversion と信仰の証明

既に洗礼を受けている Gowther の改悛とサラセンの改宗は異なる現象として理解されるものの、中世における‘Conversion’はこの両者を内包した概念である。実際に John V. Tolan や Siobhain Calkin などの研究者は、中世後期の「異教徒の改宗」を扱う物語が、St. Augustine や Saul などの古典的な聖人たちの回心や、異教徒の王の改宗の物語をモデルとしていることを指摘している。

こうした Conversion は、洗礼を受けるという個人の選択によって瞬時に完成するものではなく、常に信仰の証明を必要としている。Chaucer の教区司祭が語るように、Baptism の秘蹟は真の悔恨によってその効果を発揮するものであり、続く Confirmation や Penance といった秘蹟や正しい行いによって確かめられる必要があるものである。洗礼を受けた信徒は常に正しい道を歩むことを期待されるのである。

中英語ロマンスにおけるサラセンの Conversion も同様に、洗礼に続く Confirmation に相当するようなプロットを伴っている。例えば Otuel のようなサラセンの改宗者は、かつての仲間を相手にキリスト教徒を守るために戦うことで信仰の証明を実現している。信徒の信仰を確かめる Confirmation の秘蹟における「悪魔や罪、異教徒と戦う」というイメージは、物語中で悪を象徴するサラセンとの戦闘と、親和性の高いものであるといえる。ロマンスにおけるサラセンとの戦闘は、単に聴衆を惹きつけるような盛り上がりを物語に提供するだけでなく、Conversion を確認するための重要な役割を果たしているのである。

King of Tars では、奇跡によって宗教的・人種的アイデンティティが「書き直された」様に見える首長であっても、続く展開においてサラセンの軍勢とキリスト教徒の立場から戦うことが求められている。奇跡によって縁取られた彼の改宗にも Confirmation が必要であるという事実は、宗教アイデンティティは洗礼の有無ではなく、改宗者の言動によって表されるべきものとして理解されていることを示してくれる。

5. おわりに

信仰の証明に関わる難しさは、同時代のヨーロッパにおける状況を反映しているものと考えられる。1215年の第4回ラテラノ公会議において「ユダヤ人やイスラム教徒は特別な装飾品の着用を義務付けられた」という事実は、人種的・宗教的他者を外見によってのみ区別することが困難であった当時の実情を示している。こうした背景から、物語における宗教的他者の同化は「正しい振る舞い」を繰り返し実践することによってのみ実現するものとして描かれる必要があったと考えられる。

また、異なる Conversion が物語においては同様のプロットを持つという事実は、サラセンの改宗の物語は「異教徒の改宗」を語る一方で、そこで語られる「過程」は異教徒の改宗にのみ限定されるものではないということを示唆している。サラセンの改宗譚は、言動によって自己のアイデンティティを証明する必要があることを説くものとして理解されていたのかもしれない。こうした物語に内在するメッセージは、対外的にはスコットランドやフランスなどの外敵に対して明確に自らを定義し直し、国内では異端など道を踏み外したキリスト教徒と直面していた後期中世のイングランドにおいて、重要な意義を持つものであったと考えられる。

主要参考文献

Firumbras and Otuel and Roland, ed. by Mary Isabelle O’Sullivan, EETS o.s. 198 (London: Oxford UP, 1935)

Perryman, Judith, ed., *The King of Tars: edited from the Auchinleck MS, Advocates 19. 2. 1* (Heidelberg : Winter, 1980)

Sir Gowther, in *Six Middle English Romances*, ed. by Maldwyn Mills (London: Dent, 1973), pp. 148-68

Akbari, Suzanne Conklin, *Idols in the East: European Representations of Islam and the Orient, 1100-1450* (Ithaca, NY: Cornell UP, 2009)

Calkin, Siobhain Bly, *Saracens and the Making of English Identity: The Auchinleck Manuscript* (New York: Routledge, 2005)

Daniel, Norman, *Heroes and Saracens: An Interpretation of the Chansons de Geste* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1984)

Heng, Geraldine, *The Invention of Race in the European Middle Ages* (Cambridge: Cambridge UP, 2018)

Morrison, Karl F., *Understanding Conversion* (Charlottesville: UP of Virginia, 1992)

Stacy, Robert C., ‘The Conversion of Jews to Christianity in Thirteenth-Century England’, *Speculum*, 67 (1992), 263-82

Tolan, John V., *Sons of Ishmael: Muslims through European Eyes in the Middle Ages* (Gainesville: UP of Florida, 2008)